

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

March. 2023

No.

63



関東学院大学 横浜・関内キャンパス 本年4月開校 その開設記念式典を昨年11月24日に挙行了しました

地域の方々に認められ
社会に貢献できる存在に

関東学院大学は昨年11月24日、「横浜・関内キャンパス開設記念式典」を開催しました。本学は2018年3月に横浜市の教育文化センター跡地の活用事業者に選ばれ、同年10月から新キャンパスの建設工事を進めてきました。地中障害物の発見やコロナ禍の影響により、当初の計画より工期が延びたものの昨年10月に竣工。本年4月から法学部、経営学部、人間共生学部コミュニケーション学科に在籍する約3千3百人の学生が修学します。



開設記念式典は、新キャンパス内のテナー記念ホールに近隣関係者など約400人を招いて行われ、横浜市の山中竹春市長、横浜市の清水富雄議長、関東学院大学卒業生である小泉進次郎衆議院議員に来賓としてご登壇いただき祝辞を賜りました。冒頭に関東学院の規矩大義理事長より、来賓や列席者、竣工に至るまでお力添えをいただいた方々への感謝が伝えられました。そして「政治、行政、商業の中心地であり、歴史と文化を持つ関内・関外という街の一住人として、関東学院大学の存在を地域の皆様に認知していただき、活用してみようと思つていただくことで初めてスタートラインに立てるのだと考えています。学生達が地域社会で課題に直面して自らの無力さを知り、授業で学び、社会で実践する、その繰り返し」が「社会連携教育」であり、横浜・関内キャンパスを拠点としてさらに推進し、地域社会に貢献してまいります」と式辞を述べられました。

地域発展の取り組みへの
期待がこもった来賓祝辞

続いて山中市長から「関内・関外地区に、新たな発展の地が誕生することを光栄に思います。横浜市が成長を続けていくためには、若い世代や企業を呼び込み、都市の活力を向上させていくことが重要です。明るく開放的な新キャンパスは、活気と賑わい、そして新たなイノベーションを生み出してくれる存在になるでしょう。関東学院大学の人的知的ネットワークや資源を、地域の活性化や社会課題の解決につなげ、一緒に横浜の発展に向けて取り組んでいけることを嬉しく思います」と祝辞を頂戴しました。

また、清水議長から「横浜にゆかりの深い大学が、関内駅前に進出されたことは喜ばしいことです。横浜市では、若い世代が政治に関心を持ち、まちづくりや施策に参加してもらえるよう取り組んでいます。関内・関外地区は、開港以来様々な文化を受け入れてきた国際都市であり、様々なチャレンジを受け止めることができる街です。横浜市議会も若い世代の新たなチャレンジを全力で応援してまいります」との言葉をいただきました。



山中竹春横浜市長



小泉進次郎衆議院議員

思います。世界が大きく動いている今、時代の優良企業とのマッチングにより、新しい時代を築いていくことを期待しています」と語ってくださいました。

式典の最後を飾ったのは、関東学院中学校高等学校の生徒達によるハンドベルの記念演奏です。美しい音色と調べに、演奏後は会場全体が大きな拍手に包まれました。また、式典終了後は施設担当者による新キャンパスの説明が行われ、希望者を対象に施設見学が行われました。



関東学院 O.C.C ハンドベル
クワイアによる演奏

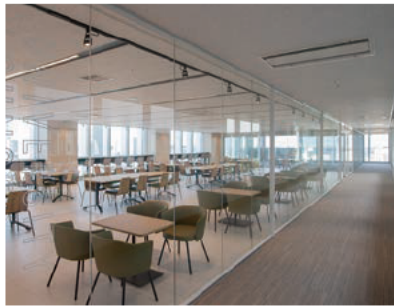


円形の客席が特徴的な
テナー記念ホール

社会とつながる
横浜・関内キャンパス

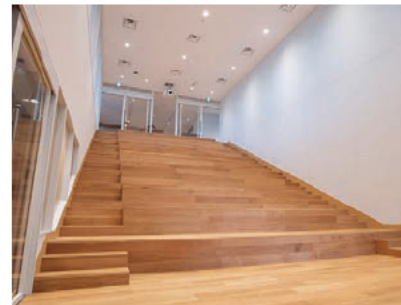
地上17階、地下2階、高さ約75メートル、延床面積約2万7千平方メートルの高層キャンパスです。低層階は市民に開かれた公共的空間を設置。カフェ、ランニングステーション、様々な業種の人達が協働できるコワーキングスペース、大学と企業、地域社会との「知の交流」を図るマッチングオフィスなどが設けられています。また、館内のカフェやブックカフェの営業を、横浜の老舗書店である株式会社有隣堂と連携して運

横浜を一望できるユニバーシティ・ラウンジ



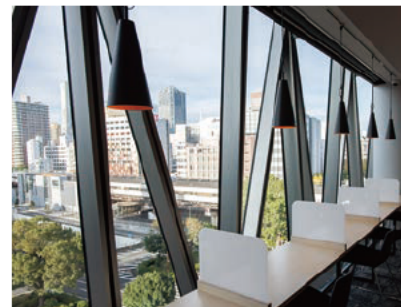
緑あふれるフォレストテラス

静かで落ち着いた雰囲気の良い自習スペース



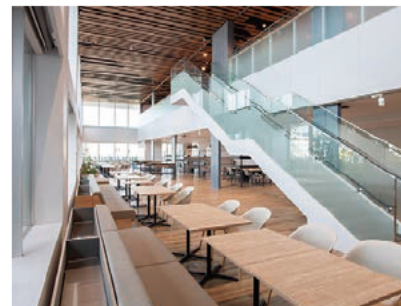
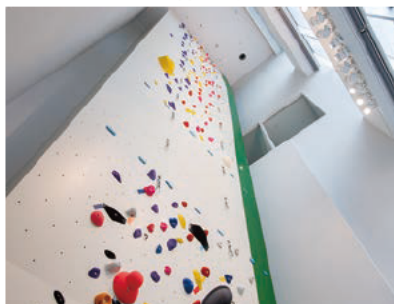
多彩な用途に使用できるステップホール

開放感のある大教室



見晴らしの良いデジタル図書館

カラフルなホールが目を惹くクライミングエリア



7F、8Fと繋がるラーニング commons

営。学生だけでなく、市民が交流できる空間を提供します。654名収容可能なテナー記念ホールは、左右の壁に横浜の歴史の建造物の象徴であるレンガ造りを採用。また、この地で40年以上にわたり市民に親しまれた横浜市教育文化センターの外壁レンガの一部を3階ギャラリに展示し、記憶を継承していきます。

中層階には、新たな学びを創出するラーニング commons やデジタル図書室、開放的なフォレストテラスなどを設置。実習やグループワークなど思い思いのスタイルで学習できる環境を整えています。

高層階は教室やゼミ室が中心のフロア。吹き抜けで眺望の良いラウンジなど、学生達の集う場所を各所に配置しています。最上階17階には横浜の美しい街並みが一望できるユニバーシティ・ラウンジ、スカイビュー・テラスを設置。懇親会場としても利用できるようパントリーを併設しています。

なお、既に昨年12月よりカフェなど一部施設の市民開放を順次行っています。お近くにお立ち寄りの際はぜひ「社会とつながるキャンパス」をご体感ください。

ウクライナ出身の音楽家ナターシャ・グジーさんを招き 関内でクリスマス・チャリティー・コンサート開催

人道支援を目的としたクリスマスイベントの報告とともに
松田和憲学院長に企画の経緯やウクライナへの思いをうかがいました。



関東学院が贈る 本物のクリスマス

昨年12月9日、関東学院大学横浜・関内キャンパスのテネー記念ホールで「KG Uクリスマス・チャリティー・コンサート」が開催されました。同ホールの落成を記念して企画されたこのコンサートは、ウクライナ出身の歌手でありバンドウーラ奏者のナターシャ・グジーさんと、ジャズピアノリストの小関基之さんが出演。事前にご応募いた



だいたの方から抽選で選ばれた426名及び学院関係者が、クリスマスツリーの光が灯る関内キャンパスに会場しました。このコンサートはウクライナ人道支援を目的とするチャリティーコンサートで、入場料は無料ですが、会場に募金箱を設置し、寄せられた募金はコーポラティブ・バプテスト・フェロシップを通じて全額寄付されます。



会場に設置された募金箱

歳の頃にウクライナの伝統的な弦楽器であるバンドウーラに出会い、その音色に魅了され本格的に学び始めました。また、被ばくした子ども達を中心とする音楽団のメンバーとして2度来日。その後、2000年より日本語を学びながら日本で本格的な音楽活動を開始しました。

コンサートが始まると、バンドウーラのノスタルジックな音色とグジーさんの澄んだ歌声がホールに響き渡り、来場者は皆熱心に聴き入っていました。第2部は小関基之さんによるピアノ伴奏での楽曲が中心。日本語の曲も交え、時にはユーモア溢れるコメントで会場を和ませながら、アンコール2曲を含む13曲を披露しました。ウクライナへの思いを込めて歌うグジーさんの歌声と平和への祈りは、来場した方々の心に届いたに違いありません。

なお、会場に設置された募金箱には約53万円の寄付を賜りました。その全額は、生活権を脅かされている子ども達や老人をはじめとするウクライナの人道支援に寄付させていただきます。

また、会場では横浜にゆかりのあるホテルや専門店のパティシエ4名が作る、クリスマスの定番菓子「シュトレン」の食べ比べセットを予約販売。その売上の一部も寄付させていただきます。皆様のご支援に心より感謝申し上げますとともに、これからもウクライナの隣人に思いを寄せ、世界の平和を祈りたいと思います。



多くの観客で埋め尽くされた会場

ウクライナの平和のために支援と祈りを

学校法人関東学院 学院長

松田 和憲



私が訪れた頃は、事故後10数年の潜伏期間を経て甲状腺がんや白血病を発症する子ども達が増えていた時期です。被ばくした子ども達の支援活動を依頼された私は、帰国後すぐに寄付を募って送金したことを機に、今でもウクライナの救済活動に関心をもち続けています。

ウクライナ出身のナターシャ・グジーさんは、6歳の時にチオルノーベリ(チェルノブイリ)原発事故により被ばくし、各地を転々とした後、首都キーウ(キエフ)に移住。8

バンドウーラの調べに 平和への祈りをのせて

ナターシャ・グジーさんとのご縁は20年ほど前に遡ります。2000年に来日してウクライナと日本の文化交流に励むグジーさんの活動を知った私は、2001年秋に大学にお迎えしてコンサートを開催しました。今回のチャリティーコンサートの企画が立ち上がった時、出演者として真っ先に思いついたのがグジーさんです。事務所に連絡して趣旨をご説明したところ、快く受けてくださいました。コンサートでのグジーさんの歌声は美しく、バンドウーラのどこか物悲しい響きがウクライナの現実と重なり胸に迫るものがありました。ウクライナの人々に1日も早く平穏な日々が戻ることを願わずにはいられません。



関東学院六浦中学校高等学校

宗教主任 入試広報部長

伊藤 多香子 野本 幸靖

オンラインによる
新たな可能性を模索

関東学院六浦中学校・高等学校では毎朝全校で行う礼拝を教育の根幹としています。「神様から与えられた使命を果たすための知恵と力と愛を持った人間を育てる、その基礎となるのが礼拝だと考えています」と話すのは宗教主任の伊藤多香子先生です。コロナ禍により休校を余儀なくされ、生徒と礼拝をともにできなくなった2020年3月。伊藤先生は「とにかく今できることをしよう」と、広報部長である野本幸靖先生に依頼してホームページで聖書の

礼拝堂の2階席に音響等の機材を設置



「新年度の広報を考えたら、一刻も早くオンラインに対応する必要があります。誰もが直面したことがない事態の中、県内私学の広報担当者達とも情報交換しましたね。本校は元々WiFi環境が整っていたので、5月には必要最低限の機材を揃えてオンライン説明会を行うことができました」

それを見た伊藤先生から「ぜひ礼拝も同時配信で」と相談を受けた野本先生。もう一人、音楽科の深野基先生と二人で中心となって対応を始めました。カメラ、ミキサー、スイッチャー等、新たに購入した機材だけでなく、先生達の私物も活用して礼拝堂に設置。パイプオルガンの音を拾う専用マイクも追加しました。

「誰もいない礼拝堂から初めてオンライン配信をした時、モニターに大勢の生徒達の顔が映った瞬間、涙が出そうになりました」と伊藤先生は振り返ります。休校が明

言葉を発信し続けることで生徒に思いを届けました。当時、野本先生はいち早くオンライン配信の実現に向けて動き出していました。

けても、以前のように一堂に集まることはできませんでしたが、教室と礼拝堂をオンラインで結び、毎朝の礼拝を守り続けるという本来の姿に立ち返ることができました。また、オンラインを取り入れたことで、遠方の教会や海外在住の牧師の方、体の不自由な方にも礼拝でお話をしていただけるなど、予想外の展開もあったそうです。「そういう意味では幅が広がりましたね」と野本先生。実は礼拝の配信に奔走した野本先生と深野先生は同校の卒業生です。

「聖書には良い言葉がたくさんあって、卒業しても心に必ず残っているんですよ。多感な時期の6年間あるいは3年間、毎朝礼拝をする環境で過ごすことが大事なのだと思います。説明会では「心を耕す」と表現するのですが、まさにそういうことではないでしょうか」(野本先生)

配信でも対面でも聖なる時間を共有

2学期の終業式に行うクリスマス礼拝は、生徒有志がページェント(聖劇)やトーンチャイムの演奏、十字架行進などを演じて、イエス・キリストの誕生を全校で祝福

し、クリスマスの本当の意味を知る大切な行事です。2020年と2021年は社会状況を考慮して事前に各バートを撮影し、字幕や曲をのせた動画を配信。クオリティの高さは学外からも評価され、保護者や受験生も観ることができて大好評だったそうです。そして昨年末のクリスマス礼拝は3年ぶりに中高それぞれ全学年が礼拝堂に集まり実施しました。「2学期よりクリスマスに照準を合わせ、1学年から2学年、3学年と徐々に礼拝堂に入れる人数を増やしていきたい。礼拝は、他の学年の人達がいる中で自分がどう振る舞うべきかを学ぶ時間でもありますね」と伊藤先生は語ります。

常にながめるかを考え創意工夫しながら、コロナ禍での礼拝を続けてきた同校。今年度は礼拝堂の改修が長期間行われるため、配信スタジオを開設して礼拝を行う予定です。礼拝の新たな可能性を見出す同校の活動に今後も注目したいと思います。



昨年末のクリスマス礼拝の様子

六浦中高が3年ぶりに対面でのクリスマス礼拝を開催

コロナ禍で実践してきた礼拝の取り組みについて二人の先生にお聞きしました。

関東学院小学校が創立70周年記念礼拝を開催

岡崎一実校長に礼拝を中心とした記念事業についてうかがいました。

サプライズに湧いた 創立記念礼拝と記念の会

2022年に創立70周年を迎えた関東学院小学校。コロナ感染状況が見通せない中、多くの人を招く式典等は行わないものの、1年を通して記念事業を展開してきました。

「5年ごとに周年事業を実施すれば、子ども達は在学中に必ず一度はそれを体験できます。今回は1年前から先生達とアイデア



牧師の中村朝美さん
(8回生)が登壇

記念の会では学校の歴史を
写真で辿る



を出し合い、礼拝を中心に様々な記念事業を付随することで、皆で節目を感じて、次のステップにつなげたいと考えました」

昨年10月7日に創立記念礼拝と併せて記念の会を開催。礼拝堂には4〜6年生が入り、1〜3年生は教室で配信映像を視聴して参加しました。また、保護者会をはじめ関係者には、YouTubeのURLを事前に送って同時視聴していただきました。

「創立記念礼拝には卒業生である日本福音ルーテル教会牧師の中村朝美さん(8回生)が来校され、小学校で校訓やSGサービスクループの活動を通して人のために生きる大切さを教わったことが、牧師になるきっかけになったと語ってくださいました。礼拝後、1校時は4〜6年生、2校時は1〜3年生が礼拝堂に入って記念の会を行い、中村さんと旧教員の八木沢薫先生にご登壇いただき、スライドを用いて創立からの学校の歴史を振り返りました。昔の校舎や授業の様子、運動会の三輪車レースなど、子ども達も興味津々でした」

礼拝と記念の会の合間には大きなサプライズもありました。一つは、新年度からモデルチェンジするランドセルと体操服の初披露です。ランドセルはリュックタイプの紺と茶の2色。体操服は緑と白の2色。い

ずれも好きな色を選ぶことができます。

「コンセプトは『選ぶ』です。ランドセルと体操服だけでなく、70周年を機に現行の服装規定を改め、性別に関係なく自由に服装を選べるよう、ジェンダーレスの時代に対応していきます」

そして、記念品であるオリジナルのミニフォトフレームの披露に続き、「65周年の時に誕生したデイベアがお友達を連れてきました」という声とともに、岡崎校長が台座に掛けられた布をとると、そこには子ども達の身長ほどもある大きなデイベアが！礼拝堂にも教室にも大きな歓声が湧き上がりました。

伝統を受け継ぎつつ 新たな挑戦へ

他にも今年度はオリジナルのマフラーやストール、オリブの会(保護者会)ではオリジナル缶入りビスカウトも記念制作。施設面ではライブラリーの改修を行いました。

「本校では『毎年イノベーション』と称して、施設改修やグッズ制作等によりブランドイメージの確立を図っています。今年度はライブラリーの改修を記念事業に位置づけ、木製書架をはじめ内装や照明を一新し

て、明るく見晴らしの良い空間に再生しました」

子ども達も「図書館みたい！」と目を輝かせていたそうです。就任して10年、岡崎校長が推進してきた一連の取り組みは今や文化となり、毎年注目されています。

「伝統を守る一方、時代に合わせて変わっていくことも必要です。それでも関東学院小学校らしさは変わることなく受け継がれるでしょうし、100周年に向けて横浜のこの地でプレゼンスを発揮していけるのではないのでしょうか」

新たな挑戦を続ける関東学院小学校。その様々な取り組みについては改めて紹介していきたいと思います。



関東学院小学校校長 岡崎 一実

関東学院高等学校の生徒2名がカタツムリの研究で 高校生バイオサミットの優秀賞と審査員特別賞を受賞

バイオサイエンス分野での研究の将来性を高く評価された
二人の研究のきっかけや決勝大会での様子を紹介します。

生命科学に取り組む 理系高校生達の熱い夏

全国の高校生がバイオサイエンス(生命科学)分野で研究の成果や計画を発表する大会「第12回高校生バイオサミット in 鶴岡」の決勝戦が、昨年8月22日から24日、山形県の鶴岡市先端研究産業支援センターで開催されました。

この大会は2011年より始まり、会場に隣接する慶應義塾大学先端生命科学研究所と、山形県、鶴岡市が主催。既に行った研究及び現在実施中の研究の成果を発表する「成果発表部門」と、今後実施する研究及び開始したばかりの研究の計画を発表する「計画発表部門」があり、優秀な発表を表彰するほか、ディスカッションや交流プログラム等が行われます。昨年は全国70高校の生徒259人が参加し、史上最多となる119チーム(成果発表部門74、計画発表部門45)が、8月上旬の一回戦(オンライン

賞状とカタツムリを持って記念撮影する
富田心香さん(左)と安宅勝美さん(右)



ン開催を行い、34チーム(成果発表部門19、計画発表部門15)が決勝戦に進出しました。この大会の計画発表部門に、関東学院高等学校3年の安宅勝美さんと富田心香さんがエントリー。書類審査と一回戦を勝ち抜いて決勝戦に出場し、優秀賞と審査員特別賞を受賞しました。計画発表部門で授与されるのは、優秀賞(チーム対象)と審査員特別賞(発表者個人対象)の2賞で、同部門参加チームでは唯一のダブル受賞であることから非常に高い評価を得たことがわかります。

植物の含有成分とカタツムリの 食性に関する先行研究に着目

二人の研究テーマは「カタツムリの食性を生物防除として活かすための研究」。カタツムリがサビ菌から植物を守る?」。カタツムリは広食性で、農作物を食害してしまう害虫とされています。また、サビ菌は農作物に寄生してサビ病を引き起こします。二人は、コーヒーなどカタツムリにとって毒性の場合はカフェインのある植物の葉にサビ菌が寄生した場合、カタツムリが葉を食べずにサビ菌だけを食べることを明らかにした先行研究に着目。サビ病除去にカタツムリが利用できるのではないかと仮説を立て、飼育して予備実験を行いました。

予備実験では、ピワ、アジサイ、ネギなど、カタツムリが嫌悪する成分を含む植物の葉を摂食するかどうかを観察。実際に摂食は確認されず、仮説の前提である「カタツムリは毒性のある葉を食害しない」との可能性

を示しました。今後はサビ菌に感染している葉と感染していない葉を使って、カタツムリの摂食行動を観察する研究計画を提案。実際の環境下での検証や、他の菌も摂食する可能性等も含めた展望を示しました。

小学生の時にカタツムリを飼っていた安宅さんは「カタツムリが大好きです。農業では害虫とされているため、どうにかできないかなと思って調べたところ、先行研究の論文を見つけて、これだ!と思いました」と研究の動機を話します。子どもの頃から動植物が好きで生物に興味を持った富田さんは「彼女はカタツムリが好きで、私は植物が好き。二人の好きなものが合わさって、今回の研究につながりました」と語ります。安宅さんが研究のアイデアを出し、自宅

文を検索して翻訳するのが大変だったそうです。

カタツムリ愛が実って ダブル受賞を達成

決勝戦は二泊三日の日程。初日は成果発表部門の発表を聴講し、高校生とは思えないほどのレベルの高さに大きな刺激を受けたそうです。二日目はいよいよ計画研究部門の決勝戦。発表は代表者一人で行うルールのため、安宅さんが担当しました。「研究によって、害虫扱いされるカタツムリを有益なもの、可愛いものとして認めてもらいたい。だから、ひたすらカタツムリへの愛を伝えました(笑)」と安宅さん。発表後は他の参加者から「カタツムリの人じゃない?」と言われたり、審査員からも「愛がすごかった」と評されるなど、相当なインパクトを与えたことは間違いありません。



壇上でプレゼンテーションする様子

発表以外にも、研究所の見学ツアーやディスカッションに参加して楽しかったと語る二人。最終日の午前に行われた表彰式で、名前を呼ばれた時は驚いて思わず顔を見合わせたそうです。午後には世界一のクラゲ水族館として有名な鶴岡市立加茂水族館の見学に参加。大会で出会った全国の高校生達と親睦を深め、現在もSNSで連絡を取り合っているそうです。また、決勝戦には生物の武田剛昌先生も同行。研究の過程では、カタツムリの購入や、夜遅くまでズームで相談に乗ってくださるなど、二人をサポートしてくれたそうです。

夏休み明けには後輩(高2)の授業でも研究発表を披露しました。勉強、部活、研究と忙しい日々を過ごした二人。「高3はぎゅつと密度が詰まって、あつという間の1年でした。バイオサミットも参加して本当に良かった。後輩の皆さんにもぜひチャレンジしてほしい」と声を揃えます。

新たな目標に向かって 研究と探究を続けたい

二人に今後の目標をお聞きしました。安宅さんは「研究はまだ途中段階なので、大学に入ってもカタツムリの研究を続けたいです。その一方、小学校の教員にも憧れています。どの道に進むかはまだ思案中です」と話します。受験が終わったら、所属するマーチングバンド部の活動に復帰し、3月23日に神奈川県民ホールで行われる定期演奏会に参加して高校生活を締め括りたいそうです。

富田さんは「乾燥地帯では植物が育たず、飢餓で苦しんでいる人達がいます。植物の乾燥ストレスに対する応答を研究して応用すれば、乾燥地帯でも作物を育てられるようになるのではないかと思います。将来は大学院や食品関連の企業で研究して、飢餓で苦しんでいる人達を少しでも助けられるような活動に参加したいと思います」と明確なビジョンを語ってくれました。

中1で一緒のクラスになって以来、仲良しの二人。取材中は笑いが絶えず、こちらも元気をいただきました。これからも夢に向かって歩いてほしいと思います。

表彰式に臨む二人



関東学院高等学校 3年
とみた このか 富田 心香さん
あとか かつみ 安宅 勝美さん

関東学院六浦高等学校の軽音楽部所属のバンドが 全国大会で日本工学院ミュージックカレッジ賞を受賞

オリジナル楽曲のライブ演奏を競う大会で高評価を得た
高校生バンドの活動をメンバーの声とともに紹介します。



音楽性の高いポップな サウンドに挑戦し高評価

関東学院六浦高等学校の軽音楽部の生徒が、昨年10月30日に東京都の福生市民会館で開催された「高校生ライブ MUSIC DAYS 2022 FINAL」に出場し、日本工学院ミュージックカレッジ賞を受賞しました。なお、前回大会でも同賞を受賞しています。

同大会は日本工学院専門学校をはじめ、

エンターテインメントに関わりのある教育機関や企業等が協賛。一度しかない高校部活動を最高の思い出にするために、全国の軽音楽部とダンス部がパフォーマンスを競うコンテストです。東京、相模原・町田、北埼玉の3つの地区予選と、動画審査によるワイルドカード予選があり、同校はワイルドカード部門には全国から16組が出場してライブ演奏を行いました。

今回受賞したバンド「ゴールデン・ファンキー・バイレーツ」は高1から高3の6人構成。オリジナル曲「ダンシングナイト」を披露しました。作詞作曲及びリーダーを務めたのは高3の杉山康晟さんです。「この大会に出るために曲を作り、メンバーを集めました。コロナ禍で制限が多かった中、この曲を聴いて少しでも踊りたくなるような気分になればいいなと思い、デイスコサウンドを織り交ぜたポップな楽曲を作りました」。ロック系のバンドが多い中、ポップでさら

さらしたサウンドが印象的です。個性的な男女ツインボーカル、一筋縄ではないかハイレベルなコード進行にもこだわりました。審査員からも曲の完成度を高く評価されています。ちなみにバンド名はあえて「ダサさ」を狙って、曲とのギャップを図ったそうです。

両親が音楽に造詣が深く4歳の頃からドラムを叩いている伊藤秀吾さん(高2)は、「始動したのはコロナ禍でのブランクをそれぞ

れが取り戻し始めていた時期。高校生では本来到達できないようなおしゃれなサウンドと、プロでも難しいとされるジャンルに、ほとんど突貫工事のような状態で挑戦しました。ばらばらのスベックが集まって、一つのものをやり遂げる感覚は自分にとってすごく刺激になりました」と活動を振り返ります。

一人ひとりの個性が光った パフォーマンス

このバンドが人前で演奏するのはファイナル当日が初めてだったそう。ツインボーカルの一人、小峰緋奈乃さん(高2)は「私はライブが好きなので、大会のことは意識せず、

とにかくライブを楽しもうという気持ちになれました。普段あまり動くタイプではないのですが、隣の人がすごく踊っていたので(笑)。私も自分なりに頑張って動きました。ボーカル二人の個性が出て、観る人も面白かったと思います」と話します。

隣の人とは、もう一人のボーカルの和知瑛斗さん(高2)のこと。「母が女優としてミュージカルにも出演していて、小さい頃から練習を見たり、一緒に歌ったりしていた影響で自然と歌が好きになりました」という和知さん。ステージでも臆することなく堂々と踊りと歌唱を披露し、ポップな世界観を作り上げていました。

キーボード担当は、小2から中2までクラシックピアノを習っていた富澤怜さん(高2)です。「ブランクもあったので緊張しましたが、終わった時は達成感でいっぱいでした。予選やファイナルの動画はYouTubeで公

開されていたのですが、友達から10回も観ちゃったよと言われた時はすごく嬉しかったです」と笑顔で話してくれました。

実はファイナル直前の二日間は六浦祭文化祭があり、それぞれ別のバンドでライブを行ったという過密スケジュールでした。高1として唯一参加したベースの大森碧彦さんは、「六浦祭で大勢の人の前でベースソロを弾いたり、ハメを外したおかげで、慣らすことができて逆に良かったです。本番前に円陣を組んで叫ぶと緊張しないことを発見したので、ファイナル当日もそれをやったら最後まで笑顔で演奏できました」と高校生ならではのバワフルさを見せてくれました。

狙っていた最優秀賞は逃したものの、見事に日本工学院ミュージックカレッジ賞を受賞した6人。発表の際に校名を読み上げられた瞬間は「うおー!」と叫んで喜びを爆

発させました。学校での反響も大きく、サビの部分をお子さんで歩いている人がいて嬉しかったそうです。

バンドには副賞として、レコーディングを行う権利が与えられました。顧問の秋吉和史先生も「成果物があるのは大変ありがたいこと」と話します。このレコーディングをもってバンドは解散。将来は音楽を専門的に学んでプロを目指す人、大学のサークルやライブワークとして音楽を楽しみたい人などそれぞれですが、かけがえのない経験を活かしていつてほしいと思います。

恵まれた環境で追求できる 六浦中高軽音楽部の活動

六浦中高の軽音楽部は、音響機材や照明等の装置を完備した専用練習室を持っています。秋吉先生は次のように語ります。「意欲さえあればいくらでもレベルアップが図れる環境です。大会に出る前にはプロのミュージシャンを招いて指導していただく機会も設けていますが、プロの演奏に対する評価やアプローチは、私にとっても勉強になります。もちろん、生徒達は大きな刺激を受けています」。

文化祭や恒例の中庭ライブ、他校との合同ライブなど、発表の場が徐々に戻ってきた軽音楽部。今後はさらに全国規模の軽音楽大会に出場する予定です。さらなる飛躍に期待しています。



杉山 康晟さん(高3・ギター)



大森 碧彦さん(高1・ベース)



富澤 怜さん(高2・キーボード)



和知 瑛斗さん(高2・ボーカル)

小峰 緋奈乃さん(高2・ボーカル)



伊藤 秀吾さん(高2・ドラム)



練習室にて軽音楽部顧問の秋吉先生(中央)とバンドの面々

進化し続ける高校生アスリート 「全日本ジュニアテコンドー選手権大会」で2連覇達成

関東学院高等学校 2年 時田 里緒 さん



優勝し、今回で2連覇となります。

朝鮮半島発祥の競技であるテコンドーは、キョルギ(組手)とプムセ(型)の2種目があり、そのうちキョルギは2000年のシドニー五輪から正式競技として採用されています。キョルギは空手とキックボクシングを混ぜたような格闘技で、打撃による獲得ポイント数で競います。試合では防具を着用し、1ラウンド2分間の3ラウンド制で行われ、2ラウンド先取した選手が勝ちとなります。

「テコンドーは『足のボクシング』と言われるように、ポイントの9割は足技で決まります。頭部への蹴りは3点、胴部への蹴りは2点、胴部へのパンチは1点です。蹴りに回転が入ると2点加算されるので、例えば後ろ回し蹴りが頭部に決まると5点となります」と説明してくれた時田さんは、小学校から関東学院に通っています。テコンドーを始めたのは4歳の時。「兄がテコンドーをやっている、練習を見てかっこいいなと思ったのがきっかけです」と話します。初めて全日本で優勝したのは小学校3年生の時。以来多くの大会で優勝を経験し、現在は全日本テコンドー協会の強化指定選手に選ばれている実力者です。

今大会の決勝でも2ラウンドで勝利を決



決勝で得意の後ろ回し蹴りを決める時田さん

ジュニアなので、優勝するだけでなく、全選手から男女1名ずつ選ばれる大会最優秀選手賞を獲って終わりたいです」と目標を語ります。

激しい競技に励む一方で「学校はすごく楽しいです。友達と毎日ずっと笑っている感じです。先生とも仲が良く、家みたいにリラックスしちゃってます」と笑顔を見せる時田さん。大会前にはつらい減量もありましたが、大会後はよく友達と一緒に焼肉を食べにいくそうです。

高校卒業後から参戦するシニアでは、カテゴリーが最軽量でも46キロ級になるため、これまでに以上にライバルが増えます。さらに五輪では49キロ級が最軽量です。「シニアでも通用するようにフィジカルやスピードを強化していきたい」と語る時田さん。これからの挑戦が続きますが「来年のバリ五輪も目指します」と力強く語ってくれました。今後も活躍に期待しています！

ジュニア最後の年 目指すは3連覇と大会MVP

昨年7月に埼玉県のアリナで行われた「JOCジュニアオリンピックカップ 第15回全日本ジュニアテコンドー選手権大会」に関東学院高等学校2年の時田里緒さんが出場し、キョルギ種目の高校生女子44kg級で優勝しました。全日本テコンドー協会が主催する国内最大の大

フランスで開催された

「BMXレーシング世界選手権」で7位入賞

自転車の格闘技と称される レースで期待の選手

関東学院中学校1年の石川智士さんが、昨年7月にフランスで開催された「BMXレーシングワールドチャレンジ(世界選手権)」に出場。クルーザークラス男子12歳以下で7位入賞を果たしました。その後も8月の「大東建託シリーズ第3戦 新潟大会」を皮切りに、日本自転車競技連盟の公認大会において同クラス3度優勝。全日本自転車競技選手権(10月・大阪)ではBMX男子11・12歳クラスで3位となり、初めて同クラスの表彰台に登りました。



代表ジャージと全日本選手権の賞状、メダル



フランスの世界選手権で日本代表として走る石川さん
(写真提供: (公財) 日本自転車競技連盟)

BMXはバイシクルモトクロス略で、「レース」と「フリースタイル」の2種目があります。石川さんが参戦する「レース」は、起伏に富んだダートコースを最大8人の選手が同時に走行して着順を競うもの

で、2008年の北京五輪より正式種目に加わりました。国内外で多少基準が異なりますが、レベルや年齢、性別に応じて細かくカテゴリーが分類され、世界選手権にも5歳から出場できます。また、タイヤサイズによってBMXクラス(20インチ)とクルーザークラス(24インチ)に分類されます。

関東学院六浦こども園に通っていた石川さんは、当時から園庭をストライダーで走り回っていたそう。6歳の時に訪れた修善寺でBMXの楽しさに目覚めます。「9歳の頃、レース用自転車に買い替えたのを機に競技を始めました。普段は地元横須賀のうみかぜ公園や、千葉と埼玉のレースコースで練習しています」という石川さん。わずか3年で世代トップクラスに成長しました。

コースは1周300〜400メートル前後。その起伏や形状に合わせて、後輪だけで進むロール、重心を移動して加速するプッシュ、そしてジャンプなどの技を使って走行し、着順上位の選手が勝ち上がっていきます。BMXの面白さを尋

関東学院中学校 1年 石川 智士 さん



ねると「8人一斉にスタートするレースは、選手にも観客にとっても迫力満点です。ロードバイクと違って、コース全体が見渡せるのも魅力の一つだと思います」と話してくれました。

昨夏の世界選手権は、足の怪我から復帰した直後で不安だったそうですが、「フランスでは自転車競技は人気があり、会場はほぼ満席。お祭りのような雰囲気助けられました」と振り返ります。7位入賞の成績により、今夏スコットランドで開催される大会の出場権は取得済み。「今年も国内外で良い成績を残し、来年アメリカのロッキンガールで開催される世界選手権にも絶対に出場したい」と意欲を見せます。目標は2032年、22歳で迎えるブリスベン五輪に出場して金メダルを獲ることです。皆様の応援よろしくお願いします。

関東学院大学から函館出身の2選手がJリーグへ

村上選手が横浜F・マリノス、河波選手がサガン鳥栖に加入

2月に開幕した今季Jリーグで活躍が期待される二人のプロフィールとコメントを紹介します。

横浜F・マリノスと提携したサッカー部強化と人間育成



合同記者会見に臨んだ河波選手（左）と村上選手（右）

関東学院大学サッカー部は現在、関東大学サッカーリーグ2部に所属し、1部昇格を目指し活動しています。関東学院大学は2006年に横浜F・マリノスと提携関係を結び、現在の奈良安剛監督をはじめとする指導者の派遣、横浜F・マリノスのトップチームとの練習やJエリートリーグ若手選手育成を目的としたリーグ戦への出場等によりサッカー部の強化を図ってきました。これまで多くのクラブチームで活躍する選手を輩出していますが、今年度の卒業生からは5選手がJリーグ所属のクラブに加入（本年1月現在）。このうちJリーグに挑戦するのが、横浜F・マリノス加入の村上悠緋選手（人間共生学部4年）と、サガン鳥栖加入の河波櫻士選手（経済学部4年）です。二人はともに北海道函館市出身。小中高とチームは別でしたが、小学生時代に函館選抜チームで出会って以来、同じフットボール選手として切磋琢磨してきた間柄です。

両方でゴールを狙うストライカー 村上悠緋選手の夢はW杯得点王

村上悠緋選手の魅力は決定力。ゴール前で果敢に得点を狙うストライカーです。大学2年の時に関東大学サッカーリーグ戦（2部）で得点王を獲得し、ベストイレブンにも選出されました。大学3年生だった2021年5月、横浜F・マリノスの練習生として参加したJエリートリーグの浦和レッズ戦でハットトリックを達成し、勝利に貢献。同年7月に2023年シーズンからの横浜F・マリノス加入が内定し、「JFA・Jリーグ特別指定選手」にも登録されました。昨年8月に行われた「JリーグYBCルヴァンカップ」のサンフレッチェ広島戦では後半から出場し、横浜F・マリノスの一員として公式戦デビューを果たしています。



横浜F・マリノスに加入する村上悠緋選手

【村上悠緋選手のコメント】

関東学院大学に入学したのは、横浜F・マリノスと提携していることが大きかったです。子どもの頃からの夢であるプロの世界を肌で感じられたことは大変貴重な経験となりました。また、自分達がサッカーに打ち込めたのは、地域や大学をはじめ多くの方々の支えがあつてこそ。これからはプロの世界で活躍することが恩返しだと思っています。ゴール前において左右両足で得点を狙えることが自分の持ち味なので、練習からどんどんアビールして試合に出るチャンスを作っていきたいです。夢はJリーグで得点王を獲得すること。そして日の丸を背負って、ワールドカップで得点王を獲得ことです。そのためにもJリーグで活躍できるように頑張りますので、応援よろしくお願いします。

攻守両面でチーム貢献を目指す スピードが武器の河波櫻士選手

河波櫻士選手の特徴は圧倒的なスピード。サイドを駆け上がってセンタリング、そして自らゴールも狙う左利きのアタッカーです。昨年9月、サガン鳥栖の練習に参加し、その走力を見込まれて加入が決まりました。実は高校卒業後にはサッカーをやめて就職しようと考えていたそうです。その気持ちを変えたのは、先に関東学院大学進学を決めていた村上選手の言葉でした。「俺も行くから、お前も来いよ」と誘ってくれたことがきっかけとなり、関東学院大学に進学。「大学でサッカーを続けるからにはプロを目指そう」と決意を固め、同じ目標を持つ仲間達に引っ張られて成長することができたと語ってくれました。



かわなみおうじ

河波 櫻士

2001年1月12日北海道函館市生まれ。ポジションはFW。小1からサッカーを始め、札幌創成高等学校では左サイドバックを務める。関東学院大学では30mスプリントで3秒83の俊足を活かして活躍。174cm、67kg。

Jリーグのピッチでの対戦が今から待ち遠しい

同じフットボールでありながら、全くタイプの違う二人。理想とする選手として、村上選手は世界最高峰のストライカーであるレヴァンドフスキ選手（ポーランド代表）、河波選手は抜群の突破力を誇る日本代表のサイードアタッカー伊東純也選手を挙げました。そこからも二人のプレイスタイルがイメージできるのではないだろうか。

Jリーグの舞台で対戦することを誓った二人は、ともに「負けたくない」と闘志を燃やします。良きライバル同士の対戦を楽しみにするとともに、今後も関東学院大学出身の選手達の活躍にご期待ください。



むらかみゆうひ

村上 悠緋

2000年12月19日北海道函館市生まれ。ポジションはFW。小1からサッカーを始め、北海道大谷室蘭高等学校では全国高校総体に出場。2020年度関東大学サッカーリーグ戦（2部）得点王、ベストイレブン。177cm、69kg。

【河波櫻士選手のコメント】

サガン鳥栖は選手やスタッフ、サポーターも素晴らしい人達で、こんな雰囲気の良いチームでプレーできることを嬉しく思っています。大学生活で最も印象に残っているのは、4年の夏の「総理大臣杯全日本大学サッカートーナメント」です。それまで一度も全国大会に出たことがなかった僕にとって忘れられない大会となりました。その一方で、昨年は怪我のために出場機会が少なかったことは悔いが残っています。今後は体のケアなどをもっと勉強して、プロでの生活に活かしていきたいと思います。持ち味である背後への抜け出しやスピード、瞬発力をさらに磨き、一日も早くピッチに立ちサガン鳥栖の勝利に貢献することが今の目標です。感謝の気持ちを忘れることなく、これからもやっていきたいと思います。

お知らせ 関東学院大学 大学院法学研究科に「地域創生専攻」を新設



2023年4月、関東学院大学では大学院法学研究科に「地域創生専攻」を新たに開設します。

人生100年時代、と言われている今の世の中。目まぐるしく変動する社会では、過去に習得したスキルや経験、知識だけを用いて働き続けることは困難です。

公務員や議員においても例外ではありません。あらゆる側面から地域や市民、ひいては日本の社会をサポートするためには、その時の社会状況にマッチした知識を、生涯にわたって学び続け、必要な能力を常にアップデートしていく必要があります。

そういった生涯を通じた学び(リカレント教育)を提供し、時代のニーズに沿った人材の育成をするため、
関東学院大学は大学院法学研究科に「地域創生専攻」を新設します。

包括連携協定を締結している地方公共団体等からの推薦入学試験といった、現役公務員を対象としたリスキングなど新たな取り組みもあります。

法学研究科
地域創生専攻特設ページ



詳細はQRコードよりご覧ください。

